

氏名（本籍）	新井 清美
学位の種類	博士（ヒューマン・ケア科学）
学位記番号	博甲第 7472 号
学位授与年月	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	アディクションのリスク判断と段階に応じた介入に関する研究

主査	筑波大学教授	博士（医学）	大久保一郎
副査	筑波大学准教授	博士（医学）	森田 展彰
副査	筑波大学准教授	博士（保健学）	橋爪 祐美
副査	筑波大学准教授	博士（医学）	太刀川弘和

## 論文の内容の要旨

### （目的）

本研究はアルコール依存症や病的ギャンブリングに至る前の段階で発見し介入することで、重症化を予防することを目指し、以下 3 つを目的として研究を行った。

1. アディクションに至るプロセスと、それに関わる心理行動特性を明らかにする
2. アディクションの進行を予防・介入するポイントを明らかにする
3. 物質アディクションと行動・過程アディクションのプロセスと介入について、共通点と相違点を明らかにする

### （対象と方法）

研究 1：アルコール依存症専門病棟に入院し、離脱症状が消失して自己の経験を振り返って第三者に語ることのできるアルコール依存症者とその家族 15 組に半構造化面接を行い、質的記述的方法により分析を行った。

研究 2：医療機関職員 88 名、断酒会会員 85 名に質問紙調査法による調査を行い、各変数と AUDIT(Alcohol Use Disorders Identification Test)との相関を確認し、階層的重回帰分析を行うことで飲酒に影響する要因を検討した。

研究 3：SHG (Self Help group)・回復施設に繋がっていて、自己の経験を振り返って第三者に語りことのできる病的ギャンブラーとその家族対して半構造化面接を行い、継続的比較分析法による分析を行った後、理論的飽和に達したと判断された 8 組で分析を終了した。グランデット・セオリー・アプローチにより分析を行った。

研究 4：SHG・回復施設に繋がっている病的ギャンブラー176名に質問紙調査法による調査を行い、各変数と SOGS (South Oaks Gambling Screen)との相関を確認し、階層的重回帰分析を行うことで病的ギャンブリングに影響する要因を検討した。

### (結果)

研究 1：アルコール依存症へと変化していくプロセスは、《お酒の効用を求める》《直視し難い現実から逃れる》《健康上の障害が出現する》《飲酒への自制が利かなくなっていく》の4つの段階があった。

研究 2：AUDIT 得点は平均 21.3 点であり、危険な飲酒低リスク者が 35.9%、高リスク者が 12.4%、依存症疑者が 52.7%であった。AUDIT を従属変数、AUDIT に有意な関連を認めた変数を独立変数として階層的重回帰分析を行った結果、「年齢」「性別」「失敗、関係・心の不調和」が危険な飲酒に影響していた。

研究 3：病的ギャンブリングへと変化していくプロセスは、《ギャンブルの効果を体験する》《お金をやりくりしながらギャンブルを楽しむ》《ギャンブルへの動機づけが強化され》《金銭の入手経路を多様化する》《病気という認識がなく、借金・返済の自転車操業に陥る》《追い込まれ、治療や施設に結びつく》の6段階があった。

研究 4：SOGS 得点は全対象者が 5 点以上であり、病的ギャンブラーと判定される者であった。SOGS を従属変数、SOGS に有意な関連を認めた変数を独立変数として階層的重回帰分析を行った結果、「年齢」「性別」「サービス職業（過去の職業）」「金銭を得るための手段」「制限」が病的ギャンブリングに影響していた。

### (考察)

研究 1.2 (危険な飲酒のリスク判断)

1. 4つの段階のうち、第2段階から患者・家族の認識の相違が現れ、第3段階以降双方の認識や感情の相違が大きくなり、第4段階では双方の認識の共通点が見られなくなる。患者・家族間に生じる問題認識の時間的差異が、飲酒問題深刻化の負の連鎖に影響している。
2. 低リスク者程各動機の得点が低く、リスクが高くなる程各動機の得点が高値を示した。
3. 飲酒により生じた失敗、人間関係・心の変化、望まない事態が生じても飲み方を変更しない（又はできない）状況があった。

研究 3.4 (病的ギャンブリングのリスク判断)

1. ギャンブル問題の深刻化には6つの段階があり、問題が深刻化してもなおギャンブルと借金の問題の関連付けが難しい状況にある。
2. ギャンブルをする動機は、初めは楽しみや気分転換、人間関係の円滑化であるが、問題の深刻化に伴い金銭を得るための手段に限局される。

アルコールとギャンブルの共通点と相違点

1. 共通点は、身近な人が当該行動をとるために興味・関心が高まること、人間関係を円滑化させるために当該行動を用いること、本人は家にいないことが多く、家族が状況を把握しにくいことである。
2. 相違点は、問題が深刻化していく過程で現れる症状である。アルコールは、酔っている状態や身体

症状を周囲が察知可能である。そして、危険な飲酒の継続により飲む場所は外から家へと変化していく。一方、ギャンブルは問題が深刻化するとより家に帰らない状況となり、本人と家族の関わりが希薄になる。また、問題の中心が金銭的なものであり、本人が家族に隠しきれない状態となるまでその事実が顕在化しない。

#### (結論)

1. アルコールとギャンブルとでは、問題が深刻化していく過程で現れる症状が異なる。アルコールは身体的変化が起こり、問題に気づきやすい。一方、ギャンブルはお金の問題であり、どうにもならなくなるまで周囲は気づきにくいという特徴がある。
2. 本研究対象者は、一般人口と比較して当該アディクションのリスクが高い対象であった可能性がある。今後は多様な段階にある者への調査を行い、我が国における危険な飲酒やギャンブルの実態、危険な飲酒者やギャンブラーの特徴等も明らかにし、その特徴に応じた介入方法を検討していく必要がある。

## 審査の結果の要旨

#### (批評)

本研究は危険な飲酒やギャンブルの認識における変化のプロセスや、リスク判断とその段階に応じた介入方法を検討することを目的に、実際のアルコール依存症や病的ギャンブラー及びその家族等を対象に、質問紙による調査や半構造化面接による質的記述法を実施した。その結果、アルコール依存症や病的ギャンブルへのプロセスには前者には4つの、後者には6つのプロセスが存在することが判明し、また AUDIT や SOGS 点数に有意に影響する要因として、「失敗、関係・心の不調和」や「過去の職業」等が検出された。

アルコール依存症や病的ギャンブルはどちらも社会的に大きな影響を及ぼすアディクションであり、これらを予防することや問題が深刻となる前に早期発見し介入することは、重大な社会的課題である。本研究はこれらの課題に対して挑戦したものであり、独創的なものである。得られた結果を一般化するには留意すべき課題があるものの、本分野の研究の更なる発展への基礎的論文として有益なものであり、また、これらのアディクションの早期発見方法や各段階における介入方法の確立は重要な行政課題でもある。本論文はこれに対して有益な情報を提供しており、学術的にもまた行政的にも意義ある研究と評価できる。

平成 26 年 12 月 26 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。